

2011/6/20

生・労働・運動ネット

〈エクソダス〉 2011 通信 4

富山市神通町3-5-3

TEL 076-441-7843

FAX 076-444-6093

ブックガイド:

この驚天動地の〈反転〉を模索する

— 9つの手がかり(1)



「この事態を、ではなく、この事態に、われわれは何を思考すべきだろうか」(註)——このようなおもいかられて、「3・11」以来、あれこれ、手がかりになるものを求めて、右往左往している。事態の変化に応じて何が手がかりになりかとも変化するのだから、手がかりになるもののありようは、不可避に暫定的であるしかないだろう。それでも、「パン」だけではなく「ことば」もまた必要であることは言うまでもない。とりわけ、この事態にかかわる「言語戦」の〈むこう〉へ行くためには。——以下、「9つの手がかり」を並べて、少しばかりの〈註〉をつけることを試みる。その並べ方の順序は、とりあえず、手がかりとなる著作の、この列島社会での発刊の順序に従っている。(註)「現代思想—特集・災害」(2006年1月)の「編集後記」(池上善彦)から。

● 鷗飼哲「避難都市を今、ここに」(「抵抗への招待」みすず書房／1997年所収)

■これは、ヨーロッパ地方自治体会議／国際作家会議共催の1996年の第1回「避難都市会議」への参加レポートなのだが、そこにながれる基本的なモチーフは、1996年1月の新宿西口地下道路からの野宿生活者の追い出し—1995年のゼネストが闘われたパリの街頭—迫害されて亡命を余儀なくされた作家達のための「避難都市」のネットワークとを結ぶことで浮上する、「〈街〉とは何かという問い」である。著者は、「避難都市ネットワークが取り組んでいる課題」は、「〈都市〉と〈国家〉の原理的相克」にあると言い、「いかなる意味で都市は国家から独立できるのか？どの程度まで、どのような条件の下で、それは国民国家という内部の外部たり得るのか？」(傍点著者)というように、問題を提起する。J・デリダは、「万国の世界市民、もう一努力だ！」というアピール(「世界」1996年11月)で、「避難都市ネットワーク」の構築に伴走することを試みているが、その試みに触れて、著書は「国家主権に基づかない国際法を思考し発明する努力」(同上)が求められており、「私たちの、今、ここに〈避難都市〉を開くための思考と実践の努力が問われている」と言う。

■なお、梅木達郎「国家・無縁・避難都市」(「現代思想」／1999年3月)なお、この文章は梅木達郎に収録されている)は、同様の趣旨で「避難都市」の問題を取り上げているが、フランスにおける移民／不法滞在者に対する「統合という名の排除」にふれて、「伝統的なアジールの場が確保され、しかも国家という枠組みが避難所を作ることに無力であるばかりかそれに敵対するという事実は、新たなアジール建設を緊急の課題として浮かび上がらせずにはいない」として、J・デリダの上記のアピールに即して、次の問題点を指摘している。——1.「問題を作家・知識人に限定してはならない。」2.「他者を歓待することを絶対的倫理として肯定しなければならない。」3.「かつて存在していたアジールの伝統をもう一度呼び覚まし・・・全く新たな避難都市のコンセプトを創出しなければならない。」4.「今後も存在するか定かでないそうした「領域」の姿をかいま見せてくれるのが、国際作家会議の提唱する避難都市ネットワークであることは間違いない。そこにかすかに認められるように思われるのは、『権威なき連帯力』とでもいべきものではないだろうか。」そして、J・デリダのいう「新たなインターナシ

ヨナル」にふれている。——なお、「アジールの伝統」とのかかわりで、網野善彦の「無縁・公界・楽」にふれて、洋の東西を問わない「無縁」の原理の系譜にたつことの重要性を、述べている。

■上でふれた会議の開会式で、E・グリッサンの読み上げられた演説——「都市、世界の声たちの避難所」があることを、付け加えておく。（「全—世界論」（常川邦夫訳／みすず書房／2004年）所収）その中で、グリッサンは「都市は国家に於いては地域的であり、世界システムに於いては国家的であるが、〈他者〉の特殊性に同意するときには、再び自らの特殊性に回帰する」と言っている。

■ここで、きわめて不十分なかたちにおいてでしかないが、どうしてもふれておきたいものがある。それは、東琢磨「ヒロシマ独立論」（青土社／2007年）である。豊かな想像力にみちた著作——上でふれた鶴飼、グリッサンにもふれている——を、ここでの関心にしたがって、「避難都市」という帰結の部分だけを切り取ることは、著者に対して著しく礼を欠くことになるが、その全容については、別の形でふれることを予定しているので、ごく簡単に紹介することにする。

——著者は広島をさまよいめぐり、記憶や思い出をまさぐり、四つの「広島」を浮き上がらせる。軍都「広島」／原爆投下—壊滅—「復興」によってたちあがる平和理念としての「ヒロシマ」／現に存在する「広島」／「広島」で壊滅にさらされ、被曝を抱え込みながら、あるいは広島に生き、あるいは広島からろうじて逃れた人々、また、1945年以後、「核」の脅威の下であるいは死にいたった、あるいはその生を脅威にさらされ続けてきた・きている人を含む「ひろしま」。その上で著者は、「現在の広島が、今一度ヒロシマとなるためには、『日本』のアリバイとしての平和都市としてプレゼンスするのではなく、シュリンクバックされた平和のテーマパーク都市としてではなく、明確な友愛の念をもって、友と自らを脅かす暴力への非合意を謳うことをおそれてはいけない」と言う。そこから、「そのような重さを担ったシンボルが、傲慢な『日本』に利用されるくらいなら、『独立』した方がいい」というイメージーションを立ち上がらせる。それが「避難都市」としての「ヒロシマ」である。末尾の「正義と平和のための独立空間ヒロシマ独立宣言及び憲法試案」で、「広島市には、以下の項目の遵守を要求する」としている。——「①ヒロシマは、避難都市宣言を行う。原稿の広島市旧市街地の車両規制などの再再開発を実施、さらに当空間周辺の市管理建造物を避難空間として提供・活用する。②避難都市内に於いては、本憲法、日本国憲法及び諸国際法規を直接適用し、日本国の下位法規には拘束されない。③ヒロシマ避難都市は、いかなる法規に基づく「犯罪者」であっても、あらゆるものを受け入れる。この「避難民」は、本空間及び避難都市内においては、避難元のあらゆる法規の適用から除外され、②の法規以外の拘束を受けない。」そして、それらの要求を裏付けるものとして、「空間籍所持者の権利と義務」が、次のように規定される。——「暴力を行使する国家・共同体に対して反対の意を唱えることを義務として要求する。」「この義務は、空間籍非所有者に対しても行使されなければならない。」このような構想が、以下のような著者の祈りにもにた想いに裏付けられていることに心うたれる。「私たちは広島にありながら、無数のヒロシマに呼びかける。Hiroshimaではなく、hiroshimasとことばにしてみるのだ。世界中のあらゆる「ヒロシマ」的な状況に置かれた人々の声に耳を澄ますことを私たちは目指す。都市のなかの貧困や不正。自国の、あるいは異国の軍事にさらされる島々。あらゆる「ひろしまの子」たちの叫びに耳を澄まし、また、呼びかける。」

●野口武彦「安政江戸地震—災害と政治権力」（ちくま学芸文庫／2004年—初出は1997年）

■「その地震が政権を潰した！巨大災害が幕府瓦解を導くに至る歴史のうねり」——野口武彦「安政江戸地震」の文庫版につけられた「帯」のことばである。文庫版の裏表紙には、以下のようにある。「巨大災害は、政治と社会に蓄積されたひずみを一挙に顕在化させずにはおかない。政権の当事者能力の欠如。地震後の社会の『ラディカルな能天気、支配層への期待感ゼロ状態、とことん徹底的な政治的無関心。』国家権力は液状化した地盤の奈落に自重で沈降していく。江戸の地殻に走った亀裂は、いかにして幕府の基盤を掘り崩し、政権瓦解を導いたのか。その歴史のうねりを・・・描く、災害と政治の歴史学。」

■著書は「阪神大震災」という「驚天動地」に出くわし、「安政江戸地震」のことが「その最中ふと頭に浮かび、だんだん明瞭な形の想念になっ」と言い、両者の間にはひとつの「決定的な違い」、つまり「首都を襲ったか否か」があり、「巨大災害がいつ起きるかは決定的に重要である」、「この『いつ』は・・・一政治権力の生態サイクル史上いかなる時期にあるかである」と問題を据える。そして、「歴史は揺り返す」として「地震の周期律」にふれ、それに由来する「歴史地震」について、「一国の歴史の動向に作用した地震が『歴史地震』なのである」と言う。さらに、「歴史の激変を語るに地質学は比喻をもって」することと「地殻の変動を語るのに政治学的用語をもってすること」との「反転」関係の上に、「数々の歴史地震は、あたかも人心が地震を呼び込み、政変と災異呼応を予定していたかのようなイリュージョンを出現させる」とのべる。

■このように、「本書がめざしたのは、災害史、政治史、社会史、民衆史等々のいずれでもなく、一定の周期性をもって国家権力を襲うカタクリズムの年代誌」であるという著者の自負は、「文庫版あとがき」に、「阪神大震災の国内情勢は、長期不況、金融不安、政治不信・・・という具合に、七十年前の関東大震災以後の経過に酷似し、当局者が繰り返して辿るまいとする轍に、避ければ避ける程はまり込んでいくかのように見える」。「それから7年。事態は間違いなくその轍を踏んでいるとしか思えない」と、言わしめている。その上で、以下のように、強い口調で言い切っている。「最近目に付いた印象的な数字がある。」「2003年現在で、『ニート』と呼ばれる若年失業者数は五十二万、フリーター人口は四百十七万。全国のホームレスは二万五千二百九十六人。国民年金未納者は加入者の四十五パーセントを占める一千万人。」「・・・「もちろん直接的には地震災害とは関係ない。しかし、いったんことが起こった場合、それらはすべて総和され、すさまじい負荷重量となって社会にのしかかるであろう。」「・・・「巨大災害は、微細に蓄積されている変化を一挙に積分せずにはいない。」

■最後に蛇足になるが、同じ著者による「江戸がからになる日」について、簡単にふれておきたい。——「江戸がからになる日」は、「石川敦論第二」というサブタイトルが付された同名の著書に収録されている。（筑摩書房／1988年）——それは、『至福千年』をめぐる江戸学と異端黙示録」というサブタイトルから明らかなように、上でふれた「安政江戸地震」が帰結した「幕府瓦解」にかかわる、ありうべからざる「千年王国」蜂起譚としての石川淳「至福千年」へのオマージュとでもいうべきものである。著者は、1960年代の世界的激動を透視するとでもいうべき石川淳の「革命精神」の躍動が、「安政江戸地震」が喚起した「イリュージョン」と呼応していると感じており、その感受が、後に上でふれた著

作に結実したのだろう。

●雑誌「現代思想」—「特集災害 難民・階級・セキュリティ」(青土社/2006年1月)

■全体は、災害から／災害のパラダイム／災害と難民／災害を見る／災害と階級／災害とセキュリティの6つから構成され、15の文章が収録されている。——先にこの「ブックガイド」の冒頭で、この特集の編集者の言葉を引用したが、その引用した部分のあとにつづく次のことばは、この特集のモチーフをよく表している。「せりあがってくる不安というつるつるした、思考しようとするとその表面をどこまでも曲率に従って滑るしかない事柄を、表面に溝を刻み、逆らってまで何とか思考の対象とすることが、この時代の思想の一つの手がかりなのだ。」

■その言うところの表面に刻む「溝」が「難民・階級・セキュリティ」というキーワードに他ならない。収録されているM・デイヴィス「ニューオーリンズの置き去りにされた者たち」／S・ジジック「略奪され強姦せねばならない(と見放されている)主体」／H・アディウイジャヤ「津波のあとに何が起きるのか」は、「ニューオーリンズに襲撃したハリケーン・カトリーナ」／「インド洋津波」による災害という『『自然』災害の犠牲者の、人災的本質に光を当て』、『『自然』が曝露する、日常的に隠蔽されてきた社会構造』を、鋭く捉えだしている。また、その一方で、長原豊「彼らの『全体』と『格付け』」／矢部史郎「虐殺・トリアージ・“生きた労働”の管理」は、「首都直下地震対策案内調査会報告」(2005年7月)・「首都直下地震対策」(2005年9月)の分析にたつて、いわゆる「危機管理」問題に於いて用される「トリアージ」なる発想を貫くものを暴き出す。さらにまた、山本唯人「伊勢湾台風といずみの会」は、そのサブタイトル「再軍備下の大規模都市災害」が示すように、「伊勢湾台風」(1959年9月)を契機とする「災害対策基本法」の誕生、「冷戦期の安全保障体制下における『自衛隊』による災害対処の枠組み」の確立を追跡している。その延長線上で、額額厚「練りの直される『国民動員想』の現況」／池田王律「災害・安全保障・危機管理」が収録されている。

■先にふれた矢部史郎「虐殺・トリアージ・“生きた労働”の管理」は、「大規模の都市災害について私たちが抱く恐れと期待は、次の三つに分類することができる」として、a「小さな個人資産の所有者たちが抱く恐れ」、b「労働者たちが抱く半ば公然とした期待」c「都市計画者と警察が抱く密かな期待」をあげている。その上でbについて、その期待は、災害下での人々の相互扶助が「分業からの解放された力であり、『生きた労働』の爆発である」ことに由っていると、cについて、「大規模都市災害とそれに備える『防災』の行政は、従来は譲歩しなければならなかった様々な権利関係を押し流し、その決定を行政権力の手で独占しようと努める」ことで、「行政独裁の樹立」が「夢」みられると指摘する。そのcの指摘の上で、「公共選択論」／「トリアージ」という発想が「民主主義に対するおぞましい挑戦」であるとする。そして、最後に、関東大震災の際の軍と自警団による虐殺が、「三一運動と米騒動を強く意識していたのは確かである」とし、「1990年代の後半、日本各地で働くボランティアの活躍が賞賛されるとき、『共生社会』という言葉が耳にしなかつただろうか。」「災害をめぐる想像力は、『生きた労働』を復活させ、『生きた労働』を管理する翼賛の思想を復活させたのだ。」問題は、「共生と翼賛ではなく、略奪と騒動を。」「米騒動の暴力に近づくために、暴動の知性を育もう。」と締めくくっている。

●高乗權（藤井たけし訳）「周辺化対マイナー化——国家の追放と大衆の逃走」（『現代思想』／青土社／2007年6月）

■韓国社会では、新自由主義再編が1990年代の後半に進行し、それから10年が過ぎ、なおそれは進行中であるが、著者は、「進行形として定義されるのが新自由主義ではないだろうか。構造調整は社会を再編するために一度だけ必要なものではなかった。むしろ、再度の構造調整が、今や一つの社会構造となっている」と言う。

その新自由主義的再編は、まさに(以下の⑥でふれる)「災害資本主義」の展開と言うべきであり、その顕著な例として、著者は、「新萬金干拓事業」／平澤大秋里米軍基地建設事業／「韓米自由貿易協定」(FTA)を挙げ、「そこには、『全体』のために『一部』の犠牲が不可避であるとの論理」がまかり通り、「大衆の生は、この『不可避である』という犠牲の中に存在している。『全体』のために、犠牲となった『一部』、結果的に『全体』に含まれない『一部』。それが、韓国社会の大多数の『大衆』の形象となった」と言い、それを「大衆の追放」と呼ぶ。

その上で、筆者は、その「大衆の追放現象」を「周辺化」(マージナル化)という言葉で理解することが事態にとってふさわしいとして、その「周辺、限界、利益、余白などの辞書的な意味」が、韓国社会では以下のような「現実的な意味」へ転化している、と言う。——『『周辺』は、権力と富の領域に於いて副次化された大衆の地位を表し、『『限界』は大衆の生の置かれた状況であって、大衆はこの10年の間、生の限界地帯へと追放されてきた』。その結果として、「大衆は生きるために必死に国家と資本とにしがみつくとことなり、国家と資本とはこのような『恐怖からくる利益』を確保する」が、「このような『利益』が『マージン』という言葉の三つ目の意味である。」そして、「不幸なことは、このようなおぞましい状況が、政治圏において全く論じられずにいるという事実である。ここに、『マージン』の四つ目の意味がある。……つまり『マージン』は政治の『余白』を意味している。」

このような意味で、『『周辺』は国家が遠く離れた空間なのではなく、それが最も鮮明に貫徹される空間であって、『『主権』は『周辺』において作動する』。しかし、「主権者のみが治外法権(—C・シュミットの言う「例外状態に対する決定権」引用者)地帯にたっているわけではなく、大衆は、「法の保護を受けないという点でそこにたっている」。こうした『『周辺』という例外的で副次的な空間が正常で核心的な空間』であるという状況に於いて、筆者は、ベンヤミンにふれて、「わたしたちが課題とすべき「真の」例外状況とはいったい何か」、「どこに於いて見出されるのか」と問いかけ、次のように言う。——「それを構築するのは権力から、法から逃走する運動である。法によって放置される生のみが存在するのではなく、法の外へと逃走する生も存在している。」

その上で、著者は、「わたしは大衆の逃走現象を『周辺化』(margin-alize)」と対比して『マイナー化(minoritize)』と呼ぼうと思う。周辺化が尺度による副次元を指すとするなら、マイナー化は、尺度からの離脱を指す。「マイノリティとしての大衆は尺度から逃走する。」「権力は大衆の生を不安定にすることで恐怖と不安を通した支配をなし得る。」——まさに、「災害資本主義」!(—引用者)——しかし、「逆説的にも知覚不可能な地帯へと逃走している大衆に対する統制不可能性の問題が新たに生じている」。さらに、先にふれた「新萬金干拓」／平澤基地建設に抵抗する「大衆は国家の追放に対して、自己の生の表面にしぶとくとどまり、強制移住を拒否した。」「『逃亡すること』はこのようにしぶ

とくしがみつくとともにある。そうすることで彼／女らは、権力の最も外に位置する。」「しぶとくとどまっている彼／女らこそが、国家の追放に対して、最も遠くへ逃亡する者たちである。」そして、「彼／女らは周辺化されず、徐々にマイナー化しつつある。彼／女らは『真の』例外状態へと移動しつつある」と、締めくくる。

■著者は、2006年5月に、その属する「〈研究空間スユ+ノモ〉の仲間たちとともに韓国社会の新自由主義的再編に反対する行進」を行い、それに基づいて以上のように述べているのだが、その〈研究空間スユ+ノモ〉については、**金友子編訳「歩きながら問う 研究空間〈スユ+ノモ〉の実践」**（インパクト出版会／2008年7月）参照。

同書には、高乗権の以上で紹介したものに加えて、その「行進」を始めるにあたっての「危機に陥った生命、その権利を問う」が、また、初めにふれた「韓米FTAをめぐる状況について」の李珍景との共同の「帝国の時代か、帝国の黄昏か？」が収録されている。

また、「VOL」編集委員会による「VOLZINE」NO. 6（2008年7月）に、筆者の「追放されし者たちの帰還：2008年キャンドルデモ」が、さらに、「現代思想」（2009年10月）に、「『知』は『生』を救えるか——人文学者と『現場』」が収録されている。

なお、その後の「研究空間〈スユ+ノモ〉」については、尹汝一（金友子訳）「生のための死」（「インパクション」NO.178／2011年2月—特集「増殖／分裂する『自由空間』——所収）参照。

■あらためて言うまでもなく、高乗権の言う「マイナー化」は、ドゥルーズ／ガタリに由来しているが、ドゥルーズ／ガタリの言う「マイノリティ」について、松本潤一郎・大山載吉「ドゥルーズ 生成変化のサブマリン」（白水社／2005年）によって、もう少し補足しておこう。

ドゥルーズ／ガタリは、マイノリティを、たんに数の多少に基づいてのみ、あるいは、マジョリティとの対比を通してのみ、捉えているわけではない。「マジョリティとは、たんに対の一方をしめるだけではなく、そもそも『マジョリティ』と『マイノリティ』の区分それ自体をも定める尺度、ないし規範である。」「マイノリティとは、マジョリティが強いる状態としてのマイノリティから、さらに自らをマイノリティ化する運動、つまり前提に描かれた尺度ないし規範そのものから漏出（逃走）する運動」である。「ドゥルーズ／ガタリは、マイノリティであることを課されている『状態』から、さらにこの『状態』を規定する枠組みそれ自体から抜け出す運動（生成変化）、言わば二重の運動として、マイノリティを捉える」。この前者が高乗権の言う「周辺化」にあたり、後者が「マイナー化」、「プロセスとしてのマイノリティである。それがマイノリティと『なる』ことである。『生成変化』とは、ある状態から別の状態へと移行するそのプロセス」をさす。さらに、「マイノリティを目指すことを通して、マイノリティは複数性へと開かれてゆく。」「マイノリティは、それぞれの与えられた状態からの漏出を通して群れをなす。そのとき、諸々の生成変化のプロセスを構成要素とする『多用体』、複数的なものが見出される。」

●E・グリッサン他「高度必需品宣言」（「思想」／岩波書店／2010年9月）

■キューバや、ジャマイカ、プエルト・リコ島といったカリブ海の中でも大きな島の少し先から南米大陸にかけて、アーチ状に小アンティール諸島（フランス語ではアンティール）の小さな島々が連なっているが、その中に、マルティニック島や、グアドループ島といったフランスの「海外県」が、英語圏の島々の

間に点在している。それらの島々は、かつては、黒人奴隷の労働によるサトウキビ等の熱帯作物の栽培を主要産業とする、フランス領の植民地だったが、第 2 次大戦後もフランスから独立せずに、法的にはフランス本国と対等な「海外県」として、現在もフランス国家の一部をなしている。

2008 年 9 月の「リーマンショック」後、投資マネーが石油や穀物の先物市場に向かい、全世界的に燃料や食料品の価格の高騰が発生した。それに対して、フランスの海外県のグアダループ島では、2009 年 1 月にゼネストが始まり、それは 44 日間の長期にも及んだが、その中で、低所得者層の最低賃金の引き上げや、生活必需品や燃料費の値下げ等が要求として掲げられた。それと連動して、マルティニク島でも、最低賃金の引き上げや、食料品等の必需品の値下げ、水道・ガス・電気代の値下げ等の要求項目を掲げて、同年 2 月からゼネストが始まり、36 日間続いた。そうしたアンティューでのゼネストの最中の、2009 年 2 月に、ゼネストを全面的に擁護すると同時に、そこでの諸要求を「高度必需品」への要求にまで高めることに向けて、カリブ海のフランス語圏の 9 人の知識人によって発表されたのが、「高度必需品宣言」である。

■「高度必需品宣言」では、まず、その冒頭で、これまでばらばらで孤立していた諸闘争がアンティューでのゼネストで同一基盤の上に組織化されただけではなく、そこで生み出された「リヤンナジ(絆・連帯・団結を意味するクレオール語)の推進力」を通して、人々の現実的な苦痛・困窮状態が希求(希望)にまで到達し、それが「忘れられ、見えにくかった」人々や、他の苦しむ人々の間にまで広がったことが、何よりも重要なことだと述べている。

それに続けて、「高度必需品宣言」では、「飲み、食べ、生き延びるといった直接的必要性」(散文的なもの)と、「自己成熟」(詩的なもの)とが、有機的に結合されるべきだという理念が掲げられている。そうした理念にもとづけば、例えば、食物は、単に我々の生命を養うものに止まらず、「尊厳、名誉、音楽、スポーツ、ダンス、哲学、恋愛」といった「内奥の自由な欲望の実現に割り当てられた自由な時間の糧」となるものであると、同「宣言」は謳っている。一方、「宣言」は、我々の生活を利己主義的な個の追求に閉じ込め、自分の労働が生み出すものを商品として消費するだけの「消費者」であるか、または、際限なき利潤を追求するだけの「生産者」という「二つの深刻な貧困」を強いるものであるとして、経済的自由主義を批判している。労働運動の歴史の中で、20 世紀の初頭のアメリカのマサチューセッツ州の裁縫工場の女性労働たちがデモをしながら唱えた、“Bread and Rose”(「私たちはパンだけではなく、身を飾るバラの花も求める」という有名なスローガンがある。同様に、衣食住といった生存のための基本的な必要物の確保と、文化・芸術の創造や享受といった高次の欲求の実現とは分離されるべきではない、という理念に立って、「高度必需品宣言」では、『「最低必需品」を別の消費物の部類、すなわち、『高度必需』に属するような部類に移すこと』を訴えている。

それでは、「高度必需品宣言」では、具体的に何を「高度必需品」と捉えているか。「宣言」では、「高度必需品」の内に入るものとして、「人民と民衆を創るという、世界の大きいなる舞台に尊厳をもって入る」ことを掲げ、それに続けて、「この運動は、我々自身による我々自身の権力へたどり着けるような変革と予測の政治力を切り拓く、そうしたビジョンの中で開花すべきである」と述べている。マルティニクでは、フランス本国からの独立か、それとも、このまま、「海外県」という位置に留まるのかをめぐって、激しい政治的な論争が繰り広げられきた。「宣言」では、そのような、独立か、さもなければ、このままフランスに従属し続けるのかという二者択一の「隘路」を超えて、「変革と予測の政治力を切り拓くビジョン」や、新しい政治的な主体の創造(「人民と民衆を創る」ということを、「高度必需」として捉えてい

る。

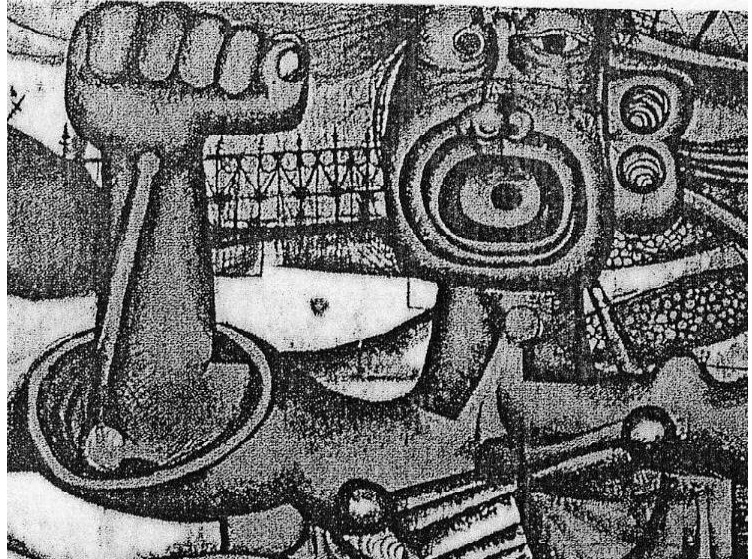
また、「宣言」では、「健全に、そして今とは別様に食べることで、我々は大規模流通業をつまづかせることができる」、「一切の自動車を絶つことで、我々はSARA（アンティューユ石油精製会社）と石油会社を地下牢に押し戻すことができる」、「ごくわずかな水滴でも、宝物の最後の欠片でもあるかのように使用することによって、水道会社を、その法外な値段をせきとめることができる」といった主張が、掲げられている。そこに見られるように、エコロジカルな自給自足への志向が、小さなコミュニティの中に閉じこもるというのではなく、「散文的なるもの」と「詩的なるもの」との結合の上に立って、全世界を覆い尽くすネオリベリズム経済システムとの闘いに向けた、反資本主義的な抵抗や、具体的な実践として構想されていることが、「宣言」の大きな特色である。

■それらと併せて、「高度必需品宣言」では、「構造的失業という鉄条網なき収容所」の中で、人間の「能力や才能、創造性、有意義な熱情」が不毛な状態に置かれていることに対して、「完全雇用」を主張している。しかし、その場合の完全雇用とは、「生産本意の凡庸な発想」に基づくものではなく、「社会性の再興」や、「破壊された人々への連帯や、共有、支持」、また、「生態系の復興について何をなしうるのか」、という発想によって検討・構想されるべきものであることを、「宣言」は訴えている。その時の要となるのが、「創造的消費(*créaconsommation*)」という概念だ。今日の集会のタイトルの中で、私たちは、日本国家—社会の「構成」的「解体」という、対立する概念を接合させた言葉を掲げているが、“*créaconsommation*”も、フランス語の「創造」と「消費」という反対の意味の語を接合させた言葉だ。学問や芸術は、単なる商品としては消費しきれない強度をもった「創造的生産」であるという意味では、学問や芸術を消費・享受するということも、単なる商品の消費に止まらない「創造的消費」となりうるものだろう。「宣言」では、「詩的価値においては、失業も、財政援助も存在しない」と述べているが、この時の「完全雇用」とは、賃労働の枠を超えて、万人が社会の中でそうした「創造的消費」に参加することとして、提起されていると言ってもいいだろう。

■かつてはヨーロッパの植民地主義の暴力にさらされ、現在もフランスに対する従属構造の下に置かれると共に、ネオリベ・グローバル経済システムの破壊性に見舞われるという、苦難の歴史と現実の経験の上に立って、カリブ海のアンティューユの小さな島々から、新しい世界のあり方を創りだすことに向けた「予兆的な政治」を提示しようとする意志や誇りが、この「高度必需品宣言」には込められている。

なお、「高度必需品宣言」では、「創造的消費」に関わる芸術や学問、教育の分野が、「原則的無償」で営まれることが提起されているということを、最後に補足しておきたい。——なお、同「宣言」の訳者による「**フランス海外県ゼネストの史的背景と『高度必需品』の思想**」（同上誌所収）は、とても参考になるものだ。

（以下「ブックガイド」2につづく）



〈エクソダス〉 2011・富山 — 企画案内

●〈エクソダス〉 2011 は、発足当初の構成を、事態の変化に応じて組み替えている。現時点では、「この驚天動地の〈反転〉を模索する」というテーマに、様々な角度からアプローチすることを、試みている。

また、それと併行して、やや長期にわたる「プロジェクト」の展開を構想している。——当面は、「県内キャラバン: 私たちは、原発を〈解任〉する—シンナ消エロ! —基モ残スナ」を予定している。

●企画——これまでとこれから

〈これまで〉

第1回企画: 沖縄と東北、そして、私・たちとが一つに連なる声の蜂起を

第2回企画: 再見! 森崎東監督作品

「生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言」

(以上については〈エクソダス〉 2011 通信2、3参照)

第3回企画: 災害/資本主義考 ・その1「災害資本主義」論

(〈エクソダス〉 2011 通信5 参照)

〈これから〉

第4回企画: 同上 ・その2 S・フェデリッチ/G・カフエンシス

「彼らの蟻塚を再建する必要があるのか?」を読む

第5回企画: 「エクソダス、今ここで!」